



我國ニ於ケル農業保護主義ヲ論ズ(其二)

津村, 秀松

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 6(5):691-706

(Issue Date)

1909-05

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051386>



我國ニ於ケル農業保護主義ヲ論ズ (其二)

神戸高等商業學校教授

津 村 秀 松

第四 我國ニ於ケル輸入米課税ハ無害有益ナリ

リトノ説(外米課税無害論)。

次ニ我國ニ於ケル農業保護論者ハ、曩キニ賦課セル外米輸入税ヲ以テ害無クシテ利大ナルモノナリトシテ曰ク、元來輸入税賦課ニヨル産業保護ノ效果ニ二種アリ。其ノ一ハ保護税ノ積極的效果ニシテ、其ノ二ハ保護税ノ消極的效果ナリ。輸入税賦課ノ結果、新ニ輸入品ノ價格ヲ騰貴セシメ、從テ其ノ輸入額ヲ減少セシメ、斯クテ内國品ヲシテ價格ノ競争上、輸入品ニ對シ優勝ノ地位ニ立シメテ以テ、價格ノ引上ニ拘ラズ、尙ホ其ノ需要ノ増加ヲ期待シ得セシムルノ場合アリ。之ヲ保護税ノ積極的效果トス。之ニ反シ、輸入税賦課ノ結果、新ニ輸入品ノ價格ヲ騰貴セシメズ、從テ其ノ輸入額ヲ減少セシメズト雖モ、更ニ輸入品ノ價格ノ下落ヲ防ギ、從テ其ノ輸入額

ノ増加ヲ防ギ、斯クテ内國品ヲシテ從來ノ價格ヲ維持セシメツ、尙ホ其ノ需要ノ減退ヲ防止シ得セシムルノ場合アリ。之ヲ保護稅ノ消極的效果トス。而シテ曩キニ我國ノ採用セル從價一割五分ノ外米輸入稅ハ、我國農業ノ利益ヲ増加スルモノニ非ズシテ、我國農業ノ利益ヲ確保スルニ止ルモノナリ。即チ第二ノ場合ニ當リ、決シテ積極的效果アルモノニ非ズシテ、單ニ消極的效果アルモノタルニ過ギズ。又ヨシ假リニ積極的效果アリトスルモ、外米ト日本米トノ間ニ石ニ二三圓ノ差アルガ上ニ、四千萬石ノ日本米ニ對シ、僅々四百萬石ニモ足ラザル輸入米ガ、一割五分ノ課稅ヲ被リタレバトテ、全體ノ米ガ其レ丈ケ騰貴スルノ理アラシヤ。世ニハ米價騰貴セバ一般下等社會殊ニ勞働者ヲシテ此上生計難ニ堪ザラシムルニ至ル可シト說クモノアレドモ、生活費ハ獨リ食物ノミヨリ成ルモノニアラズ、穀物ノミヨリ成ルモノニモアラズ。況ンヤ米ノミヨリ成ルモノニアラズ。又單ニ食物ニ就テ云フモ、我國下等社會ノ常食ハ米ニアラズシテ、麥ナリ、稗ナリ、粟ナリ、黍ナリ、豆ナリ、蕎麥ナリ、何ゾ獨リ米ノ騰貴ヲ憂ヘンヤ。之ヲ要スルニ、我國ニ於ケル米ヲ以テ他ニ代用品ナキ國民ノ必需品トナスハ、事情ニ通ゼザル者ノ言ニシテ、從テ今日米價ハ一般物價ノ

標準トナスニ足ラズ。之ヲ以テ賃銀ヲ左右スル程ノ有力ナルモノトナスモ、亦當ラザル也。且ツ夫レ勞力モ亦一種ノ財ナレバ、市場ヲ有シ、勞力ノ價格卽チ賃銀モ亦一般ノ物價ノ如ク、其ノ市場ニ於ケル需要供給ノ關係ニヨリ定ルモノニシテ、單ニ生産費ノミニヨリ決スルモノニ非ズ。況ンヤ米價ニヨリ左右セラル、ガ如キ、單純ナルモノニ非ザル也。又假リニ一步ヲ讓リ、賃銀ハ勞力ノ生産費ニ定ル可ク、勞力ノ生産費ハ米價ノ騰落ニ定ルモノトスルモ、米價騰貴ノ結果、賃銀モ亦騰貴ストセバ、差引勞働者ハ何等ノ苦痛ヲモ感ゼザル可ク、少シモ彼等ノ生活ヲ困難ナラシム可キ道理無キニアラズヤト。以上ハ主トシテ讀賣新聞一萬〇二百四十九號所載、横井時敬「米穀輸入關稅ノ及ボスベキ影響ニ就キテ」及ビ同新聞、一萬〇二百二十二號所載、横井時敬「米穀輸入稅ノ及ボスベキ結果ニ就テ」ニ據ル。

保護稅ノ效果ニ積極的效果ト消極的效果トノ別アルハ、寔ニ論者ノ言ノ如シ。サレド外米輸入稅ノ效果ハ其内ノ消極的效果ニ屬スルモノナリトハ如何ナル理由ニヨルカ。凡ソ保護稅ノ效果ニ是等二種ノ別ヲ生ズルハ、一ニ全ク關稅轉嫁ノ理ニヨル也。輸入國(卽チ消費者)ニシテ關稅ヲ負擔セバ、積極的效果ヲ現ス可ク、輸出國(卽

チ生産者)ニシテ關稅ヲ負擔セバ、消極的效果ヲ現ス可シ。而シテ輸入國ガ之ヲ負擔セザル可カラザルニ至ルハ、該輸入品ガ賣獨占 Seller's Monopoly ニアル場合ニシテ輸出國ガ之ヲ負擔セザルベカラザルニ至ルハ、該輸出品ガ買獨占 Buyer's Monopoly ニアル場合ナリ。勿論、今日ハ絶對的ニ賣獨占タリ、又ハ絶對的ニ買獨占タルモノ、太ダ稀ナレドモ、幾分ニテモ斯ル性質ヲ帶ブルモノアルガ故ニ、關稅轉嫁ノ問題起リ其ノ結果、關稅ノ效果ニ積極的ノモノト、消極的ノモノトノ別ヲ生ズル也。サレバ論者ガ我國ノ外米輸入稅ヲ以テ消極的效果ヲ起スニ過ギザルモノトナスハ、疑モ無ク我國ヲ以テ外米ニ對スル唯一若シクハ主タル輸入國ナリト斷ズルノ結果ナラシモ事實ハ之ニ反スルヲ如何セン(農商務省農務局編纂「米ニ關スル調査書」第六表及ビ第二十七表參照)。若シ又論者ノ說ノ如ク、外米輸入稅ニシテ單ニ我國農業ノ利益ヲ確保スルニ止リ、敢テ我國農業ノ利益ヲ増加スルモノナラザランニハ、其ノ一般社會ニ及ボス弊害少カラシモ、同時ニ特ニ農業ニ及ボス利益亦少カル可シ。單ニ我國ノ農業ニ對シ、現在ノ利益ヲ確保スルニ止マランニハ、現在以上ニ我國農業ノ發達ヲ期待スルコト難ク、耕地ノ増加モ收穫ノ増加モ、此上多クヲ望ミ難シ。果シテ

然ラバ、我國ニ於ケル年々ノ人口ノ増加、從テ生ズル年々ノ米穀需要ノ増加ハ、勢ヒ米價ノ騰貴ヲ來シ、遂ニ又輸入米ノ増加ニ依ル外策無キニ至ラン。結局、輸入米課税ノ目的ニシテ、單ニ我國農業ノ利益ヲ確保スルニアランカ、一時ヲ彌縫スル極テ苟且ノ策ト謂ハザルベカラズ。又論者ノ說ノ如ク、四千萬石以上ノ日本米ニ對シ、僅々四百萬石ニモ足ラザル輸入米ニ、一割五分ノ課税ヲナシタレバトテ、左迄米價ヲ騰貴セシメザル可シ。サレド左迄米價ヲ騰貴セシムル效無キモノナルヲ認ムル以上ハ、又同時ニ左迄我國ノ農業ヲ保護スルノ效無キモノナルコトヲ認メザルベカラズ。左迄我國ノ農業ヲ保護スルノ效無キモノナルコトヲ認ムル以上ハ、又同時ニ之ヲ廢棄スルモ、左迄ノ苦痛ニアラザルモノナルコトヲモ認メザルベカラズ。

更ニ論者ハ下等社會ノ生活費ト雖モ決シテ食料ノミヨリ成ルモノニ非ズト稱ス。然リ、衣食住ト稱スル程ナレバ、其ノ之レアルハ誰シモ疑ヲ容レザル所ナレド、又同時ニ下等社會程、食料費ガ生活費中ノ大部分ヲ占ムルニ至ルハ有名ナルエンゲルスノ統計ニ徴シテ明カナリ。又論者ハ我國ノ下等社會ノ常食ハ米ニ非ズ、麥ナリ、豆ナリ、稗ナリ、粟ナリト云フモ、吾人ハ然カ信ズル能ハズシテ、絶對ニ米ヲ廢スルモ

ノハ我國ニ於ケル下等社會ノ一小部分タルヲ信ズルト同時ニ、假令大部分ガ米ヲ食セズ、稗ヲ食シ、粟ヲ食ストスルモ、之レ決シテ樂觀スベキ現象ニアラザルニ、此上米價騰貴センニハ、更ニ米ヲ食スル能ハザル者續出ス可ク、若シ然ランニハ、之レ決シテ志士仁人ノ看過スベカラザル所ニアラズシテ何ゾヤ。論者ハ我國ニ於ケル下等社會ガ米ヲ食セズ、麥ヲ食シ、稗ヲ食シ、粟ヲ食スルガ故ニ、米價ノ騰貴少シモ憂フニ足ラズト云フト雖モ、吾人ハ斯ル事實ヲ知ルニ及デ、更ニ一層米價ノ騰貴ヲ恐ルルモノ也。且ツ夫レ論者ハ我國ノ下等社會ガ米ノ代用品トシテ麥ヲ食シ、豆ヲ食スルガ故ニ、輸入米ニ課税スルモ、決シテ下等社會ニ打撃ヲ與フルモノニアラズト云フト雖モ、果シテ然ランニハ、論者ハ米ニ對スル輸入税ヲ贊成シナガラ、割合ニ於テ米ト等シク、若シクハ米以上ニ輸入盛ナル麥並ニ豆ニ對スル輸入税ニハ反對セザルベカラザルニ至ルヲ氣付カザルベカラズ。

最後ニ論者ハ賃銀ハ決シテ勞力ノ生産費即チ勞働者ノ生活費ニヨツテノミ定ルモノニアラザルガ故ニ、假令外米輸入税ノ結果、米價騰貴スルモ、又米價騰貴ノ結果、勞働者ノ生活費増加スルモ、賃銀ハ必ズシモ騰貴セザル可シト辯ズ。定ニ論者ノ

說ノ如ク、勞力ノ生産費ハ賃銀決定ノ唯一ノ要件ニ非ズ、サレド有力ナル一要件ナ
リ(拙著、國民經濟學原論、下卷、五一四頁乃至五二〇頁參照)若シ又勞力ノ生産費即チ
勞働者ノ生活費ニシテ、何等賃銀ノ決定ニ影響スル所無キモノナランカ、勞働者ハ
米價ノ騰貴ニヨリ生活費ノ膨脹ヲ來シナガラ、之ニ伴フ收入ノ増加無キコト、ナ
ル可キガ故ニ、勞働者ハ更ニ一層困窮スベク、從テ米價ノ騰貴ヲ起スベキ外米輸入
税ハ更ニ數層ノ惡税トナリヌ可シ。之ヲ要スルニ、勞力ノ生産費ハ賃銀決定ノ唯一
ノ要件ニアラザルベキモ、之レ亦有力ナル一要件ナルガ故ニ、主トシテ我ガ勞働者
ノ生活費ヲ決定スベキ米價ニシテ騰貴センニハ、早晚賃銀ノ増加ヲ起ヌ可ク、又起
サハルベカラザルモノナレドモ、元來、雇主ハ強者ナリ、勞働者ハ弱者ナルヲ以テ、米
價騰貴ノ賃銀増加ニ於ケル、猶ホ響ノ聲ニ應ズルガ如ク、電氣ノ物ニ感ズルガ如ク
然ク迅速ナル能ハズ。其ノ間幾多ノ衝突ヲ起シ、其間幾多ノ奪鬭ヲ要シ、其間幾多ノ
日月ヲ重ネテ、初テ漸ク賃銀ノ騰貴ヲ見ルニ至ルモノナレバ、其ノ遂ニ茲ニ至ル迄
ハ、勞働者ハ常ニ米價ノ騰貴ニ苦シマザルヲ得ズ。而シテ雇主モ亦遂ニ賃銀ノ騰貴
ニ苦シマザルヲ得ザル也。

第五 農商工ハ常ニ併立スベキモノナリトノ說

(農商工併立主義)

最後ニ或國ニ於ケル農業保護論者ハ漸ク其聲ヲ低フシテ曰ク、凡ソ農業立國主義ト云ヒ、商工立國主義ト云ヒ、與ニ不可ナリ。國家ノ隆盛ハ獨リ農業ノ發達ノミニヨリ期待セラレザルベク、又獨リ商工業ノ發達ノミニヨリ期待セラレザルベシ。要ハ農商工ノ三業鼎立併進スルニ依テノミ期待セラル、モノニシテ、其一ヲ缺クモ未ダ以テ完全ナル發達ト稱スベカラザル也。然ルニ世ニ一派ノ論者アリテ、農ト商工トハ利害相反スルモノナルガ故ニ、到底其ノ鼎立併進スルヲ許サザルモノナリト説ク。サレド之レ全然不可也。試ニ思ヘ、原料品ニ於テハ商工ハ農ノ得意先ナルト同時ニ、製造品ニ於テハ農ハ商工ノ得意先ナルヲ從テ農業ハ商工業ノ繁榮ヲ俟テ初テ其隆盛ヲ見ルト同時ニ、商工業モ亦農業ノ隆盛ヲ俟テ初テ繁榮スルモノナルヲ。由是觀之、商工業ノ利害ヲ顧ミザルノ農業政策ハ不可ナルト同時ニ、農業ノ利害ヲ顧ミザルノ商工政策モ亦探ルニ足ラズ。之ヲ以テ吾人ハ敢テ商工業ノ利益ヲ犧牲ニ供シテ迄モ、農業ノ發達ヲ計ルベシト云フニ非ズ、唯商工業ノ發達ヲ計ルガ爲

メニ農業ノ利益ヲ犧牲トスルヲ非難スルノミナリト(註)。

(註) 農商工併立主義ノ論ハ、我國ニ於ケル農業保護論者ノ最モ得意トスル所ニシテ之ニヨリ甘ク商工立國論者ノ銳鋒ヲ避ケ不偏不黨ノ美名ノ下ニ、巧ニ平生ノ志ヲ行ハントスル最後ノ武器ナルガ故ニ、殆ンド一切ノ農業保護論者ニ依テ異口同音ニ主張セラル。

法學博士平田東助、本邦ニ於ケル農業ノ地位ヲ論ズ(太平洋第二卷第十號)、

農學士石坂楠樹、農業ヲ顧ミザル工業政策ノ誤謬(實業の日本、第三卷第二十號)、

法學士河上肇、日本農政學、第四百四十二頁乃至百七十頁、

ノ如キ、其ノ主ナルモノ也。

以上、我國ニ於ケル農業保護論者ノ所謂ル農商工併立主義ナルモノヲ聽クニ、其言太ダ巧妙ニシテ辯難攻撃ノ餘地ヲ剩サバルガ如シト雖モ、吾人ハ遂ニ之ニ服スル能ハザル也。勿論、完全ナル農商工併立主義ナルモノハ吾人ノ理想トスル所ナレドモ、此種ノ理想ヲ完全ニ實現セシメ得可キハ、彼ノ世界ノ三大國トモ稱セラル可キ英吉利、露西亞、米國ノ如ク、領土廣大ニシテ廣ク熱溫寒ノ三帶ニ跨ルガ如キ大國トナリタル上ノ話ニシテ、東亞ノ一孤島タル我が日本ノ如キ一小國ニシテ、此上無限ノ發展ヲ期セムト欲セバ、到底永ク之ヲ固守スル能ハザル可ク、到底之ニヨリ偉大ナル發展ヲ期シ難シ。古語ニ曰ク、二兎ヲ逐フモノハ一兎ヲ獲ズト。夫レ之ヲ謂フ

也。勿論、我國ニシテ米國ノ如ク茫々三百五十六萬方哩ノ大國ナランニハ、農ヲ以テ國ヲ立ツルヲ得ベケンモ、僅々十五萬方哩ナル彈丸黑子ノ小國ニ於テハ、如何程開墾拓地ヲ獎勵スルモ、以テ大ニ國ヲ興スノ基トナラザル可キハ、識者ヲ俟テ而シテ後チ知ル可キニ非ズ。論者ハ我國農業ノ年産額十億圓以上ニ上ルトテ、頗得意ノ色アレドモ、之ヲ米國農業ノ年産額百五十億圓ニ比スルトキハ、僅カニ十五分ノ一ニシテ、未ダ同日ヲ以テ論ズベキモノニ非ズ。我國ノ農業ニシテ此後發達ノ極度ニ達セバ、或ハ其年産額ヲ加倍シテ二十億圓ニ達スルノ日モアラン。サレド其竟ニ米國ニ及バザルコト甚ダ遠キヲ如何セン。若シ又我國ニシテ米國ノ如キ大國ナランニハ、廣大ナル農場ヲ内國ニ求メ得可キト同時ニ、又廣大ナル市場ヲ内國ニ求メ得可ク、農商工相助ケテ與ニ共ニ偉大ナル發展ヲ遂グルノ餘地内ニ綽々タルベケレバ茲ニ一小世界ヲ造リ、農ノ利ハ商工ノ利トナリ、商工ノ利ハ又農ノ利トナリテ、三者ハ永ク鼎立併進シ得ケンモ、今日ノ日本ハ未ダ自給自立シテ以テ超然世界ヲ睥睨シ得ルノ域ニ達セザルヲ如何セン。寔ニ論者ノ說ノ如ク、商工業ハ農業ノ基礎ノ上ニ榮ユルモノ也。サレモ自國ノ農業ノ基礎ノ上ニ榮ユルノミナラズ、又大ニ世界

ノ農業ノ基礎ノ上ニ榮ユルモノ也。又論者ノ說ノ如ク、國家ノ隆盛ハ獨リ商工業ノミニヨリ期待セラレザルベシ。サレドモ小國ニ於テハ之ヲ農業ニ比シ優ルコト萬タルベシ。吾人ト雖モ商工業ノ發達ヲ害セズシテ農業ノ發達ヲ期待シ得ルノ途アラシニハ、之ヲ歡迎スルニ躊躇セザルモノナレドモ、人口増加ノ激シキ小國ニ於テハ、其途ハ單ニ農事ノ改良ニ限ル可ク、之レトモ結局無限ノモノニアラザルベキガ故ニ、早晚廉價ナル原料竝ニ食料ヲ外國ニ仰デ以テ、內國工業ノ勃興ヲ圖リ、外國貿易ノ隆盛ヲ企テ、斯クテ國家ノ富強ヲ加ヘ、一日モ早ク國土擴張ノ大望ヲ成就スルコソ、小國發展ノ常道ニシテ、事茲ニ至ラバ、初メテ完全ナル農商工併立主義ヲ實現スルヲ得ン。

結 論

以上前號竝ニ本號論ズル所ニヨリ、吾人ハ現今我國ニ行ル、農業保護主義ヲ說明シ、批評シ了リス。サレバ之レガ最後ノ結論トシテ、前來述タル所ヲ一括シテ斷案ヲ下シ、更ニ我國此後ノ政策ニ對シ、具體的立案ヲ示サルベカラズ。

之ヲ要スルニ、農業保護主義ト云ヒ、商工立國主義ト云ヒ、其ニ半面ノ眞理ヲ含ム

モノナレバ、何レカ其一方ニノミ走テ他方ヲ顧ザルハ不可ナレドモ、其ノ内主トシテ何レニヨルベキカハ、一ニ時ト所ニヨリ決セラル可キ問題ニシテ、猶ホ彼ノ保護貿易主義ト自由貿易主義トニ於ケル關係ノ如ク、更ニ詳言スレバ、其ノ國文化ノ程度如何、竝ニ其國領土ノ大小如何ニヨリ決セラル可キ問題ナリト謂フ可シ。

サレバ大體ニ於テ、新國ハ農業ヲ以テ國ヲ立ツルヲ得可ク、之ニ反シ、舊國ハ商工業ニ據ルニアラズンバ更ニ發展ノ望ナカル可ク、又大體ニ於テ、大國ハ能ク其ノ農工商併立主義ヲ固守シ得可ク、又然カスルニ於テ益々其ノ國運ノ隆盛ト其ノ國命ノ安固トヲ期待シ得可ケンモ、之ニ反シ、小國ニ於テハ獨リ商工立國主義ニ據ルノ外、其無限ノ發展ヲ期待スルニ由無キ也。是レ吾人ガ夙ニ英吉利ノ帝國主義ヲ贊シ米國ノ農商工併立主義ヲ稱シ、更ニ獨逸ノ新農業保護主義ヲ啞フ所以ニシテ、又我國農業保護論者ノ之ニ倣ハントスルモノアルヲ誠ムル所以ナル也。

サハ云へ、吾人ハ農業保護論者ト共ニ我國農業ノ隆盛ヲ希望スルモノ也。サレド吾人ハ農業保護論者ノ如ク然リ我國農業ノ將來ニ向テ多大ノ希望ヲ維グ能ハザルモノナルガ故ニ、又然ク大膽ナル農業保護策ニ左袒スル能ハザルモノ也。吾人ノ

期待スル所ハ、唯夫レ我國農業ノ改良、耕地ノ整理、作物ノ變更、種子ノ撰擇、肥料ノ改良、農具ノ進歩、信用組合ノ發達、金融機關ノ整備、其他、種子ノ鹽水撰、通シ苗代ノ廢止、稻苗ノ正條植、害蟲ノ驅除等、耕作法ノ改善ニヨル農業ノ發達アリテ、關稅ノ増徴ニヨル農業ノ發達ニアラザル也。若シ我國ノ農家ニシテ此種ノ改良ヲ斷行センニハ其ノ收益ハ此上大ニ増加スベク、從テ我國ノ農業ハ猶ホ永ク現在ノ繁榮ヲ將來ニ維持シ得可ケンハ、固ク信ジテ疑ハザル所ナレドモ、此上盛ニ耕地ヲ増加シテ、全然食ヲ外國ニ依頼スルノ境遇ヲ脱センコトハ、此上米穀輸入稅ヲ増徴シテ、五割六割若シクハ其以上ニ迄モ引上ザル限り到底望無キモ、亦固ク信ジテ疑ハザル所也。而シテ事茲ニ至ラハ我國ノ勞働者ハ竟ニ其生活程度ヲ上昇スルノ期無ク、我國ノ工業者ハ竟ニ其ノ生産費ヲ低廉ナラシムルノ期ヲ失フモノナルハ、是レ亦吾人ノ固ク信ジテ疑ハザル所也。斯クテ報酬漸減ノ理漸ク行ハレントスル農業上ノ舊國ニシテ而モ小國タル我日本ノ現國土ヲ以テシテ、強テ農業保護主義ヲ採用セント欲スルハ、是レ強テ小國發展ノ常道ヲ逸セントスルモノニシテ、農工商併立主義ノ美名ノ下ニ國家ヲ賊スルモノト謂ハザルベカラズ。

サレド吾人ハ現狀ヲ以テ満足スルモノニ非ズ。吾人ハ須ラク現狀ヲ超越セザルベカラズ。吾人ハ須ラク小日本ヲ脱シテ大日本タラザルベカラズ。而シテ其途ニ茲ニ至ルノ途ハ帝國主義ヲ措テ、他ニ良策ナキヲ信ズ。

吾人ハ嘗テ支那ト戰テ之ヲ敗リ、今又露國ト戰テ之ニ克ツ。今日ノ日本ハ最早ヤ昔日ノ日本ニ非ズ。世界ニ於テハ遂ニ第一等國ノ列ニ加ハリ、東亞ニ於テ優ニ其霸者タルノ地位ニ立ツ。サレバ吾人ハ此機ヲ利用シ、此地位ヲ利用シ、先ヅ朝鮮ト結デ之ト關稅同盟シ、次ニ之ヲ支那ニ及シテ以テ、遂ニ東亞ニ三國關稅同盟ノ基礎ノ上ニ一大帝國ヲ建設シ得タランニハ、吾人ハ永ク彼ノ世界ノ三大國ト拮抗シ得可ク我日本帝國ノ國運ヲシテ萬古無窮ナラシムヲ得可ケン。事茲ニ至ラバ、日本ハ專ラ其工業ノ原料、國民ノ食料ヲ支那朝鮮ニ仰ギ、支那朝鮮ハ專ラ其工業品ヲ日本ニ仰デ以テ、三國與ニ優ニ東亞ニ自給自立シ得可キコト、猶ホ彼ノ大英帝國成ルノ日、其母子國間ノ關係ニ於ケルガ如キモノアラン。

之ヲ以テ吾人ハ農業保護ノ必要ヲ認メザルニ非ズ、農工商併立ノ利益ヲ悟ラザルニモ非ザレド、現在ノ日本ノ國土ヲ以テシテハ到底大ニ其ノ國ヲ興ス能ハザル

ヲ信ズルヲ以テ、須ラク先ヅ我國商工業ノ一大發展ニ一意專心シ、大ニ其國富ノ増進ヲ計リ、盛ニ其國力ノ發展ヲ期待シテ以テ、經濟上、政治上、軍事上、優ニ第一等國タルノ實力ヲ備ヘ、敢テ他國ノ干涉ヲ恐レズシテ、容易ニ其帝國主義ヲ實行シ得ルノ資格ヲ備フ可シト主張スル也。此ノ如クシテ東亞ニ宏大ナル一大帝國ヲ建設シ得タランニハ、吾人ハ敢テ農業ノ利益ヲ犧牲ニ供セズシテ商工ノ發達ヲ計リ、商工ノ發達ヲ害セズシテ優ニ農業ノ繁榮ヲ期待シ得可ク、農工商併立主義ノ理想ハ茲ニ至テ初テ實現セシムルヲ得可ケム。サレバ今日ハ其準備ノ時代也。準備ノ時代ニ於テ輕卒ニモ農業保護主義ニ走テ鎖國主義ニ傾キ、國家自足經濟主義ヲ採テ退嬰主義ニ出デントスルハ、是レ再ビ昔日ノ經濟狀態ニ復歸セントスルモノニアラザレバ、則チ内ニ萎縮シテ以テ小日本主義ニ満足セントスルモノ也。今ヤ列國競爭ノ世ノ中ニ於テ此ノ如キ小日本主義ヲ奉ズルハ斷ジテ不可也。吾人ハ到底大日本主義ヲ標榜シテ盛ンニ奮闘セザルベカラズ、勿論吾人ト雖モ商工立國主義ニ伴フノ危險ヲ認メザルニ非ズ。サレドモ艱難ハ汝ヲ玉ニス可ク、大ナル成功ニハ常ニ大ナル危險ヲ伴フモノニアラズヤ。開國、進取、活動、奮闘ハ過去ニ於テ帝國ノ發展ヲ起セリ

第六卷 (七〇六) 論 說 我國ニ於ケル農業保護主義ヲ論ズ

第五號 (五四)

獨リ將來ニ於テ然ラズト云フヲ得ンヤ(完結)。